

郷 土 館 だ よ り

V o l . I No.1

1978. 8. 1



(三島市郷土館全景)

発刊に際して

三島市長 奥田吉郎

東海の名園、楽寿園内に校倉造りの三島市郷土館が落ち着いたたたずまいを見せております。この郷土館は、郷土三島の考古学的出土品をはじめ民俗資料を保存継承するとともに、それらを逐次公開展示することによってその土地に住む人々の自然と生活とのか、わり合いを知り、次代の郷土建設への教育の場としての目的を果たすべく多くの市民各位のご好意により、昭和46年10月に開館したものであります。郷土館が「ふるさとづくり」の糧として更に市民の皆様にご利用されることを念願し「郷土館だより」が生まれました。この「郷土館だより」を通して郷土館への親しみと理解を高められることを期待して止みません。

発刊の辞

三島市教育長 吉川静雄

長谷川福太郎郷土館長の宿願であった「郷土館だより」が漸く刊行されるに至ったのは慶びに堪えない。郷土館は郷土の歴史であり、文化であり、生活であり、将来の展望をするものであるが、意外に、全く意外に、郷土人の郷土館への関心が低い。ほんの限られた郷土人、そして意外に多くの異郷人の関心を惹いているにすぎない。そのことを嘆き、少しでも多くの人たちの関心を昂めるための一方策として、この「郷土館だより」発刊の構想を持つに至ったのである。ささやかな「便り」によって一人でも多くの方が、郷土への関心を懐き、一人でも多くの方が郷土館を訪ねられることを希って、発刊の辞とする。

郷土史の散歩道 (1)

大庭景親

館長 長谷川福太郎

伊豆の流人「源頼朝」の監視役として、世に知られているのは、伊豆の目代「平兼隆」をはじめとして、土地の豪族「北条時政」「伊東祐親」らである。こうした。平家一派の中であって、ことさらに頼朝を仇敵のごとくつけねらっていたのが、大庭景親であった。

ところで、大庭氏の祖先をたどって見ると、恒武平氏の一族「平良茂」から出ている。かの「後三年の役」で勇名を馳せた、「鎌倉権五郎景正は、景親の曾祖父に当たっている。

もっとも、大庭姓を名乗ったのは父の影忠からで、その住所が大場村であることに依ったものといわれている。三島市大場は古くは三島大社との関係で、大庭と呼ばれた地である。したがって、大庭姓発祥の地としては、もっともふさわしい所である。しかし、この大場村については、神奈川県藤沢市の北に当たる、相模国大場村であるという説もある。何れが真か確証がない。何れにしても景親は頼朝の幕下で名を挙げた、三浦氏、和田氏とも同族に当たる、れっきとした平氏である。

また、治承四年（一一八〇）八月二十三日、石橋山の戦で大勝を得た景親が、最後の詰めで梶原景時に寝返られ、九仞の功を一簣に欠く結果となる。その景時とは従兄弟同士でもあった。こうした背景を持つ彼が、源氏の嫡男頼朝を仇敵としてつけねらうのは、源平争覇の時代相から見て、理の当然のことであった。

ところで、頼朝が「平氏追討」の以仁王の令旨を受けたのは、治承四年四月二十七日のことであった。たぶん、その前後から急にあわただしくなった頼朝の動静から、いち早くこの事を景時は知ったに違いない。そして、景時なりに監視の目を光らせていたものと思われる。これを、知ってか知らずか、頼朝はかねてから信仰の厚かった三島大社に、百日暁天の祈願を掛けることになる。伝えに依ると、頼朝は人目を忍ぶの余り、安達藤九

郎ただ一人を連れて、北条から暁闇を突いて大社へ日参したという。もちろん、代参の日もあったであろう。この、百日暁天の祈願行が、果して実説か否かは別として、この間における「闇眠の松」・「蛇が橋」など彼に対する伝承は多い。その何れもが、多くの土地の人人の温い、流人頼朝への同情の現わればかりである。ところが逆に、この護衛の薄い透き間だらけの頼朝に、将来の禍根を断つ絶好の機会であるとして、必殺を企てたのが、外ならぬ大庭景親である。彼が、具体的にどの様な行動に出たかは、一さい不明であるが、これを知った妻の驚きは、また格別なものであった。それもそのはず、実は彼女は、源家ゆかりの生まれの者であったからである。ひたすらに、夫を思い止まらせようとした妻の苦心も、ついに頼朝の身代わりとなり、一刀の下に夫の刃に伏す結果となってしまった。はじめて、妻の苦衷を知った景親は、その心情を哀れみ、その冥福を折るために小祠を建てた。それが、いわゆる「妻塚」である。現在も東本町に、「妻塚神社」として、その名残りが引き継がれている。

さて、その後頼朝は、同年八月十七日三島大社の大祭の日を期して兵を挙げ、山木に平兼隆を討ち取っている。その頃、「源氏再興・平家追討」の頼朝の檄は四方に飛んでいるが、未だその去就はわかっていない。頼朝は手兵三百を率いて関東に向かった。まことに危急含みの重要な初動の時期であった。この意味で、八月二十三日の「石橋山合戦」の勝敗の価値は大きい。かつて、永暦元年（一一六〇）三月十一日・頼朝の伊豆流謫に際して時の衆人が、「虎を野に放つが如し」と調したというが、果して頼朝が野虎になり得るか否かの瀬戸ぎわであった。事実、平家方の名将「薩摩守忠度」も、平軍が一日も早く箱根を越えて関東に進出することの重要性を強調している。つまり、どちらが早く関東の武士を傘下に治めるかが、天下分け目になるからである。

ところで、石橋山の雨中決戦は兵力の差違もさることながら、まさに頼朝の完敗であった。ここでも、大庭景親は戦勝の完全を期して、徹底的に頼朝を追跡し最期の土壇場に追い込む。しかし、梶原景時の寝返りによって、筋書はどんでんがえしとなり、ついに虎を関東の野に放つ結果となった。八月二十九日「真鶴」を発し海路安房に上陸してからの、頼朝の関東平定はまことに目ざましいものであった。治承四年十月六日に、鎌倉入り

した頼朝は、さらに十六日には関東の大軍を率いて西上している。この、疾風迅雷ともいふべき頼朝の動勢に対して、京都における平氏の驚きもさることながら、実はもっともあわてたのが大庭景親その人であった。景親の石橋山合戦以後の動静は、よくわからない。然し前後の事情から推察すると、大体その付近に駐屯していたものであろう。記録に依ると約三千の兵を手にしてた。

ここで、ちょっと目を他に移すと、頼朝の檄に応じて起った甲斐源氏の「武田信義」らが、十三日に駿州大石沢（現富士宮市）に進出している。軍兵二万余騎という。同じ日、平維盛を大将とする「頼朝追討軍」は駿河の手越に着陣している。

つまり、景親の軍は、西に二万の甲州勢・東に雲霞の如しと形容された関東勢に、包囲された形となっているのである。心中、大いに恐れあわてた景親は、一日も早く西走して維盛の軍に合しようと考えた。しかし、足柄山を越えて藍沢宿（現御殿場市）に出た段階で、それが全く不可能となり、文字通り進退きまわってしまった。そうなると、悲しいことに軍兵は景親を見捨てて逃走する。そこで彼は軍を解き、一時身を隠したが、とうてい逃ることのできないことを知って、ついに頼朝に降つ

たのである。大日本史に依ると、景親は子と共に斬られている。

以上が、大庭景親の事蹟の概要である。巷間、景親は頼朝の対照的な敵役として、ともすると悪人扱いを受けているようである。「勝てば官軍」という評価が、そのまま彼に用いられているならば、それは、まことに気の毒なことである。景親は、終始命を掛けて平家に忠節を尽した男で、当時の武人としては、典型的な生き方であったという見方も出来よう。少くとも、平氏の出でありながら、変節して頼朝方となった北条時政に比べれば、はるかに武士らしい男であった。ただ、惜しまれることは、彼の頼朝を見る目が、同じ伊豆の出で、同じように平家に忠節を尽した伊東祐清に比べると、一段と低かったことである。かつて、頼朝が流人の身であった時、祐清の父伊東祐親に殺されようとしたことがある。その時祐清が、頼朝を危地から逃走させたのであった。後日、祐清はそのことについて、頼朝にこう語っている。「我れかつて君を保護せしは、決して賞を期したるにあらず。実に天下の為に惜むべきものありたればなり」と。祐清は、平氏のために近江の篠原で戦死している。それは木曾義仲との戦であった。

郷土館フィールドワークから

多呂地区の歴史・民俗調査(1)

杉村 斉

まえがき

近年の家屋改築ブームの波は、農村の風景を変えてしまった。わが三島市においては、旧形式の民家はもう数えるほどしかない。数年の後にはこれも全て改築されてしまうであろう。時代の波であると言ってしまうればそれまでであるが、寂しいことである。しかし一面から見れば、私達は時代の移り変りの目撃者であると言える。今この状況を正確に記録して後世への証言とすることは、有意義なことではなからうか。ともあれ、性急な状況の要請に応えるべく、調査を始動した。

私達は調査のテーマを多呂地区の民俗、歴史とした。多呂という村落の成立と変遷を歴史調査の軸とし、民俗は、大正年間頃を時代基準にして話者からの聞きとり調査によって、衣食住等民俗全般を記録してみたいと考えている。そして最終的には、市内の他村落についても調査を進めてみたい。民家調査はその第一歩である。

今回の民家調査の対象に選んだ三島市多呂の新井宅には、まさに滑り込みセーフのきわどいタイミングで駆けこんでの調査であった。新井宅ではすでに新宅の建築許可をとって、旧宅の家財を運び出している時であった。

新井典衛氏宅（三島市多呂二八〇の一）

新井宅は伊豆箱根鉄道大場駅の北東1キロほどの所にある。ここは旧君沢郡多呂村（現在は三島市多呂）であり、東側に箱根山西陵の山を背負い、西の平野側には大場村、中島村、北沢村と境を接している。

新井家の古文書によれば、新井家では明治初年の頃に当主長左衛門が近隣9ヶ村の惣代を勤めていることから、当家の家柄がしのばれるわけであるが、家屋はこの長左衛門以前に建造されていたと伝えられている。長左衛門の先代孫七が文久二（一八六二）年に亡くなっていることから、建造年

代は、推定だが、十九世紀の半ば頃ではないかと思われる。

屋根は寄せ棟型の草屋根（カヤ）の三方に瓦屋根を回した造りになっている。三方の瓦屋根の下は3尺巾の縁になっていて、西側の便所をはさむ形でヒロマ・ザシキ・ナンド・板の間を囲んで回っている。

間取りは広間形式がとれる四間取りになっている。しかし四間取りといっても、各部屋割りが均等な田の字型にならない喰違いが少しある。広間は表向きにヒロマとザシキ境を取り払ってオフルマイ等の地域の催しに使用していたようだ。明治年間にイタク（母屋）を移築したと伝えられているが、この時の改築による変形が影響していて、間取りの不明な点がある。

間取りと名称

次に新井宅の間取りに見る各部屋の名称や用途及び設備について、新井ためさん（明治三五年九月四日生）からうかがったお話を整理して記録してみたい。

ヒロマ

ヒロマは大戸を入れてすぐ左側のニワ（土間）に面した畳敷の部屋である。ためさんのお話によれば、この部屋はちょっとした人寄せの時に使用した、比較的簡便な客むかえの座敷だったということである。昔はアガリハナ三尺ほど板敷であったという。ニワから見て正面のザシキ側に神棚がある。元は天井より低い位置にあったものらしいが、養蚕に部屋を使う関係上、天井上にまで神棚を上げてしまったようだ。

ザシキ

南表側に面したヒロマの奥の部屋である。奥正面左側に一間巾の床の間を設けた上等な座敷である。大規模な人寄せ、結婚式や葬式のオフルマイの時には、ヒロマとの境を取り払って大広間を設けたようだ。県東部地域ではこの部屋をザシキという名称で呼ぶのが一般的なようであるが、中、西部ではデエなどの呼称が開かれる。

ナンド

ナンドの語源は貴族の家の大納戸、小納戸などの物を納める所の名称に由来するという説がある。民家のナンドにおいても、タンス等のおもな家財

がそこに置かれることが普通のような。ナンドを主人夫婦の寝室にするのは全国各地でみられる。そのため部屋の名称にもネベヤ、ネビヤ、ヘヤ等があって知られている。そのほかナンドは産を行なう場所としても使用される。地方によってはナンド神が祀られているが、ここでは見かけない。

ディヤードコ（ダイドコロ）

ニワに面した大戸口から一番遠い奥の板の間を指す。昔はここは板敷にすることが普通であったが、現在では畳に換えている家がほとんどである。新井宅では現在も板敷であった。食事形式がチャブ台やテーブル形式になる以前には、板の間に各人の箱ゼンを並べて食べる食堂であった。隣りの間のチャノマとの境に戸は無く、時にはチャノマでも食事をしたそうである。ディヤードコにはオイベッサン（恵比須、大黒）も祀られている。

チャノマ

チャノマの特色は、ここにユリイ（囲炉裏）があったということであろう。ユリイを囲み家族が団欒して、くつろぎを得ることのできるこの部屋は家の中心である。ユリイの真上の天井は煙が出られるように四角に切り取ってあり、そのまま屋根のケブダシ（煙出し）へと続いている。一間形式の原始家屋においても、炉はかならず部屋の中央に築かれていた。後世、家屋は炉のあるこの部屋から発達したとも言えるであろう。

ユリイの四辺には主人の座（ヨコザ）、もっともニワ側の座（キジリ）などのように、それぞれ座名があって、座る人間も決められていた。主人の左隣りは主婦の座、右隣りは来客のあった時の客座とされていたようだ。日常生活においては、ヨコザ以外は各人自由に座を占めていたと思われる。ヨコザについては「ひとのヨコザに猫、バカ坊主」などとこの地方で言われるように、主人の座は絶対的に高位の座であって、他の誰れもがそこに座ることを許されなかったという。チャノマは昔の家長制度を象徴する部屋でもあった。チャノマに仏壇があるという家はこの地方に多い。

ニワ

農家のニワ（土間）はどこでもたいへん広くとっている。雨天の時、ヨナベの時、ニワは頻繁に使われた。作業場でもあった。雨天の時、ニワに埋め込であるタタキ石の上で藁をたたいてやわら

かにして縄をない、獲り入れの多忙な時は、カラスをニワに持ちこんで夜遅くまで扱摺りをした。「とにかく昔はよく働いたもんだ」という話は、調査中何回も聞かされたことであった。

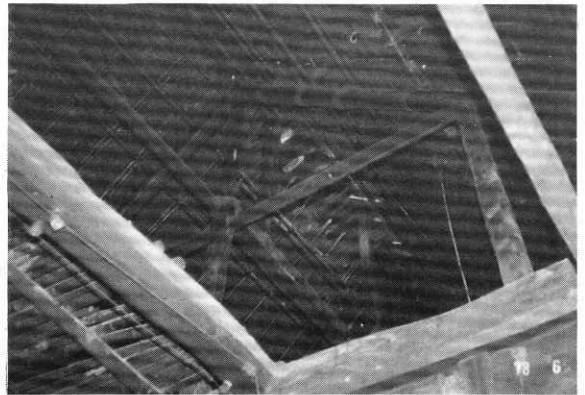
そのほかに、ニワにはカマヤと呼ばれる一角がある。カマヤにはヘッシイ、流し場が設けられていて、食事の煮たきが行なわれた。火を使う場所であるため、火災にはずいぶん注意したようだ。この地方では、火伏せの神として葦山の荒神様からいただいてきたスミンチョを祀ることが普通のようにである。

ムカイザシキ

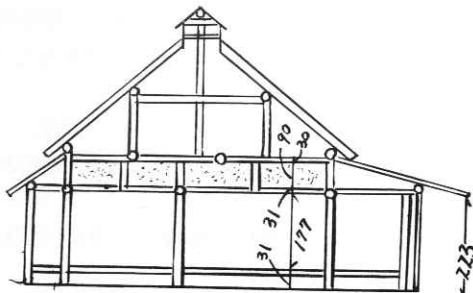
新井宅にはニワの一角にムカイザシキがある。ムカイザシキは、名主級の大きな家では手伝いのオトコをおいていたため、オトコの部屋として使用されていた。オトコドンの部屋などの名称で呼ばれている。



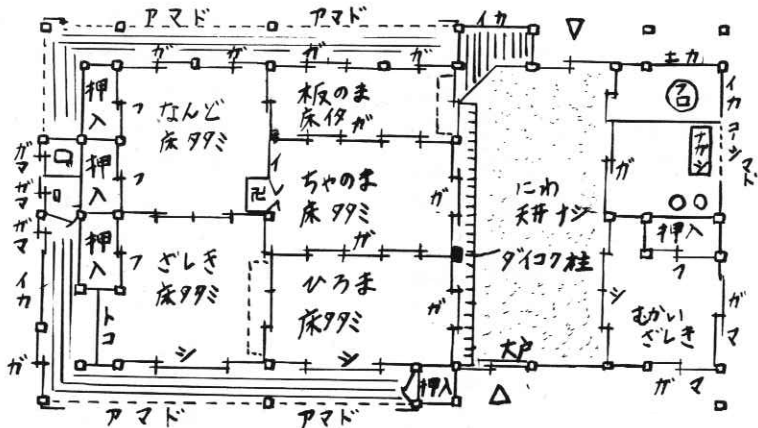
(新井宅)



(家の中から見たケブダシ)



(断面図)



(現状平面図)

嘉永七年寅11月4日己の上刻

大地震記録

豆州三島茶町 松村伊三郎しるす

館長 長谷川福太郎

この古文書は、三島市西本町二ノ十五、高木長平氏が郷土館へ寄贈して下さったものである。

いわゆる「安政大地震」に関する民間人の記録として、意義深いものである。この記録中、三島宿分については、たぶん筆者の見聞に依るものと思われる。現在に置き換えて見ると、被害の大きさや、その実情がまことによくわかる。しかし、その他については、幕府から派遣された、田辺勘十郎勘定方の書上書（報告書）を写したものと思われる。したがって、内容については相当に信頼してよい正確なものといえる。

以下は、その解説である

時 嘉永七年寅十一月四日（註、同年十二月四日安政と改元されたため、安政元年と称されている）己の刻、大地震。

三島宿千貫樋より東は新町まで、残らず潰れ。但し、当社大明神は、三重塔・矢大臣門・御拝殿右三か所ばかり残り、その他大鳥居を始め諸社皆潰れ。但し、四日早々神主家より、寺社御奉行太田摂津守様まで相届け。

寺院は貳拾五か寺、但し、茅町善教寺本堂半潰れ。林光寺境内残らず。木町観音堂半潰庚申堂半潰。蓮行寺・本覚寺・七面堂・宝国院・日限地藏堂・其の内時の鐘は無事。

常林寺・大中島・小中・芝町・裏町・水上・宮の後・神主・社家・金谷町・長谷・新町・薬師院は半潰の所、十二月十二日明け六ッ時焼失。

宮倉成真寺本堂半潰。二日町寺院は残らず町家は半潰。市が原菱屋兵右衛門より出大。宮倉の角まで和泉屋。東は金谷町角まで、西は間宮丸屋まで。外に、久保町木屋清兵衛、平田屋儀兵衛両家土蔵とび大にて焼ける。

田町福寿院、柳原薬師堂潰れる。御蔵場は半潰。久保町は水上土手切れて大水出る。間屋場は残らず潰れ。

御公儀より、田辺彦十郎御勘定方より、国々御見分。

東は川原ヶ谷より谷田・御門・中村・平井・柏谷・葦山其の外田方辺は格別にも無し。

下田湊は津波にて凡そ千軒ほど、居屋敷とも皆

川原になる。其の節異国ヲロシヤ船渡来。小田原、沼津・掛川三家様より御出張。外に御奉行井沢様御出張。右地震津波両方にて、町家死人凡そ六七十余人の御書上。

夫より、妻良・子浦・松崎・戸田何れも外浦の分人家流れ、内浦残らず。別して、重須村は六十三軒の所、五十三軒流れ、長浜村残らず。三津・小海流れ、重寺は格別にも無し。

夫より、獅子浜・志下・馬込は無事。下香貫・桃郷・東の山根通りより塩満までの間凡そ田地式百俵預けほど湖水となる。其の外、山宮様水門より津波打ち入り、田地大荒れ。

沼津水野出羽守様御城、御本丸役所諸家中残らず潰れ。大手御門・下町御やぐら・西の方やぐらばかり残る。

城下上土町カシマヤより出大、水神の堂まで焼ける。三島（註・神社名か）よりは格別にてもなし。是より、間門村より原宿、柏原より元吉原まで、格別の事もなし。

根方通りは、村々式参軒又は五六軒位の事。岡の宮村光長寺は残らず潰れ。

小林村は、本家九軒めり込む。但し、縦壺町半ほど、横式拾間ほどの間、人は九人の所式人ほり出し、残り七人は一切相知れず。

夫より、下長窪まで道上街道土手くずれ、人馬通交一切なし。納米里十四五軒、是より佐野村まで其の由。

伊豆島田村残らず潰れ。徳倉村大潰れ、沢地村半潰れ。壺丁田村半潰れ。

此の外、香貫山外原通りくずれ、山が下狩野川ばた通行なし。木瀬川・石田潰れ。長沢半潰。柿田半潰れ。玉川・平田辺無事。

吉原宿より加島山淵・蒲・大宮・油井・興津・江尻丸焼。清水・府中丸焼。駿府御城残らず潰れ。夫より、久能山残らず。丸子・岡部両宿無事。藤枝・島田・金谷は潰れ。日坂は無事。掛川は丸焼け。袋井・浜松何れも潰れ。

是より、三州・尾州辺は少しの由。京都も格別の事もなし。大阪は四日地震、五日津波にて町家人死凡そ式千人の由。

夫より、四国阿波・土佐此の両国凡そ十八万石ほども流れ。是より中国辺、九州まで国々津波の由。

此度の大地震当国を堺にて、是より箱根御本陣向き潰れ。御関所半潰れ。権現様は鐘堂斗り。是より関東筋は潰れ家はなし。以上

特別展報告～郷土の災害史展～

5月5日から7月4日までの2ヵ月間、「郷土の災害史」のテーマで、特別展を開催いたしました。ここにその内容等を簡単にご報告します。

開催主旨

最近、殊に伊豆半島周辺に地震や集中豪雨が連続して大被害をもたらしています。一方では、東海大地震説なる説も有って話題を呼んでいます。これは科学的にも裏付のある説でもあるようですが、この時にあたり、今一度真剣に災害に対する自覚を確認しなければならないのではないかと考えたわけです。そこで、私たちの地方では過去にどんな災害が起きているのか、その歴史を顧みることによって、未来の災害に対する心構えを持ちたいと考え、今度の企画を行ないました。

展示内容

展示には次のような小コーナーごとのテーマをもってあたりました。

1. 郷土の災害史年表
2. 北伊豆地震
3. 伊豆半島沖地震
4. 南伊豆集中豪雨
5. 国内国外の大地震
6. 狩野川台風
7. 安政地震の記
8. 防災と地震予知
9. その他

1. 郷土の災害史年表は、土屋寿山氏が三島市誌編纂に際して調査作成した災害史年表に、1974年以降の災害4つを加えてパネルに転載したものです。この年表は、もっとも古くは大宝2年(702)9月の大風・飢饉の記録(続日本紀による)から合計136以上の災害について調べ出したものであり、価値あるものだと思います。今回の展示にはこの年表のパネルに並列して、いくつかの災害を裏付ける古文書史料も展示しました。写真の元録16年の大地震の古文書、宝暦の全町火災の文書などがそれらです。

2. 北伊豆地震は、今から48年以前、昭和5年11月26日に起った地震ですから、まだ記憶しておられる方も多いと思います。震央(震源の真上の地上)が丹那盆地というきわめて近い所の地震のため、三島における被害は関東大地震以上だったようです。このコーナーの主な展示資料は「地震災後作成された「伊豆震災記録アルバム」や絵は

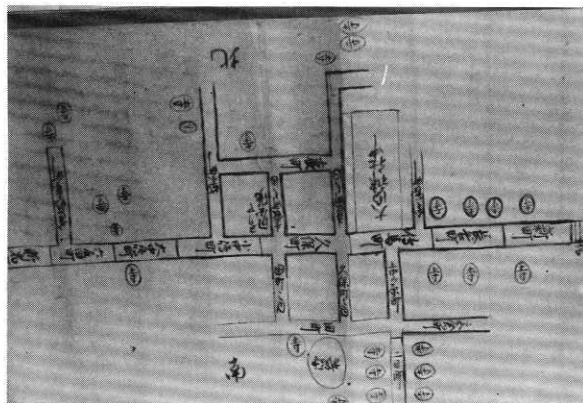
がき等から複写した写真です。展示した写真は51枚、ほかに関係文書8点でした。三島大社手水舎の倒壊、三島久保町通りの被害(写真)等、身近な光景に見るショックは大きなものでした。



(狩野川台風 昭和33年9月27日朝刊)



(地震の記、小林村変地之図)



(宝暦2年<1752>三島宿焼失図)



(北伊豆地震・中央町付近)



(北伊豆地震・三島大社手水舎)



★★★★ おしらせ ★★★★★

●郷土館の行事予定

- 8月8日 夏休み体験講座〈縄文土器作り〉
対象 市内小学5・6年生
- 8月20日 一般講座〈箱根山西麓研究〉
講師竹折直吉氏 テーマ「五ヶ新田の民俗」
- 9月17日 一般講座〈節根山西麓研究〉
講師高島勝氏 テーマ「自然」
- 9月27日 県外歴史探訪〈鎌倉〉
バスで鎌倉の史跡・寺社を巡る
- 10月8日 市内史跡めぐり
- 10月15日～11月30日 特別展「日本の暦」
- 11月19日 講演会「日本の暦」
講師 郷土館学芸員杉村斉

秋の映画教室

- 10月10日(火)
- 10月22日(日)
- 10月29日(日)
- 11月3日(金)
- 11月5日(日)

※申込、問合わせは郷土館まで

利用案内

休館日 毎月第1月曜日
 開館時間 午前9時から午後4時30分まで
 入場無料

■編集後記■

小鳥のささやきと木立のあいさつに迎えられ、心地よく仕事につく。皆が集まった所でおなかの底から「おはよう」の言葉を交わす。一番目は鋳開けの仕事。多勢の人達に接するように。二番目は清掃作業。お客様が気持ちよく見てくれるように。朝の精一杯のお化粧のあとは玄関脇の「道祖神」「お地藏様」に願ひ事。事務所へ入ると電話の音がけたたましい。「アア!やっぱりこども世間の中か。」
 (稲木)

郷土館だより No.1
 昭和53年8月1日発行
 (年3回発行)

編集・発行 三島市 郷土館
 住所〒411 三島市一番町19-3
 TEL 0559-71-8228